武蔵国秩父札所三十四観音霊場の形成にみる中世後期禅宗の地方展開

――特に曹洞宗陸奥国黒石正法寺末、広見寺とその末寺を中心に――

小野澤　眞

はじめに

筆者はこれまで、律僧とならび中世時衆が葬式仏教などとして、仏教庶民化にはたした実態を追究してきた。鎌倉新仏教は、鎌倉期に濫觴があるものの、律僧・時衆の営為を承けて、実態は室町・戦国新仏教とよぶべき性格をもつ。その中で伸長著しいのは浄土、真、臨済、曹洞、法華宗であり、真言宗の〝改革派〟ともいえよう新義真言宗である。[1]

さて埼玉県秩父郡市（秩父市および秩父郡四町・一村を併せた総称。旧武蔵国秩父郡）は禅宗寺院の比率が非常に高い（第一表）。秩父札所三十四観音霊場寺院（以下全体を霊場、個別寺院を札所と記す）をみても、曹洞宗寺院が大半で、あとは臨済宗南禅寺・建長寺派と新義真言宗の豊山派である。霊場は中世前期の修験者の活動を母胎とするとみられるが、その形成過程は曹洞宗および臨済宗の伸張と大いに重層する。これら室町・戦国新仏教各宗は、霊場に入りこんで勢力を拡大させ、さらにそれを足がかりに武蔵国秩父郡全域に末寺を建立していく。

曹洞宗の地方展開については、鈴木泰山（『曹洞宗の地域的展開』思文閣出版・一九九三年八月）、広瀬良弘（『禅宗地方展開史の研究』吉川弘文館・一九八八年一二月）両氏を中心に、あまたの先行研究が存在する。本稿ではそれらを承けつつ、埼玉県秩父地方において、曹洞宗が札所霊場をとりこむ工（行）程と、その背景に山岳修験・水場があることを追っておきたい。曹洞宗・臨済宗が新仏教として地方展開する手法の例証とすることができよう。

なお、札所寺院にはその番号を算用数字で附す。秩父郡吉田町、荒川村、大滝村は秩父市に、秩父郡両神村は小鹿野町

第一表　秩父郡市における寺院宗派一覧

自治体名	宗派名	法人数
小鹿野町	天台寺門宗	1
	真言宗智山派	4
	真言宗豊山派	7
	臨済宗南禅寺派	2
	曹洞宗	15
	仏教系単立	1
皆野町	高野山真言宗	1
	真言宗智山派	9
	真言宗豊山派	7
	曹洞宗	5
横瀬町	真言宗豊山派	1
	臨済宗南禅寺派	3
	曹洞宗	7
長瀞町	天台宗（山門派）	1
	臨済宗妙心寺派	2
	臨済宗南禅寺派	3
	真言宗智山派	12
	真言宗豊山派	1

第二表　秩父札所観音霊場の寺名一覧

自治体名	宗派名	法人数
東秩父村	天台宗（山門派）	1
	真言宗智山派	3
	臨済宗妙心寺派	2
	曹洞宗	6
	日蓮宗	1
秩父市	真言宗智山派	2
	真言宗豊山派	12
	真言宗醍醐派	※1
	臨済宗南禅寺派	6
	臨済宗建長寺派	8
	曹洞宗	51
	浄土宗（鎮西派）	1
	日蓮宗	1
	法華宗本門流	※1
	仏教系単立	2

【凡例】

Ⅰ　典拠は http://www.pref.saitama.lg.jp/site/shukyo/shukyo-ichiran.html（埼玉県庁総務部学事課・二〇一〇年九月一〇日現在。同課によれば、同資料に紙媒体の刊行物はない）。なお一般に寺・堂には宗教法人格をもたないものがあり、秩父霊場に複数ある。逆に新寺も存在し、※を附したものは「～教会」の類で、戦後のものである。これらの点注意を要し、数量はあくまで目安としてご覧いただきたい。

Ⅱ　自治体区分は大合併後。

番号	長享二年「番付」札所名称	後継札所名称	現行札所宗派	現行札所所在地
1	定林寺	西蔵部寺（妙音寺）	曹洞	秩父市坂谷
2	疏福寺＊	真福寺	曹洞	秩父市山田（納経は光明寺）
3	今宮＃	常泉寺	曹洞	秩父市山田
4	瑯之下＊	金昌寺	臨済	秩父市山田
5	野坂堂	語歌堂（長興寺）	曹洞	横瀬町下郷
6	岩井堂	卜雲寺	曹洞	横瀬町芦米
7	大観滝	法長寺	曹洞	横瀬町芦米
8	橋立寺＃	西善寺	臨済	横瀬町横瀬
9	篠戸	明智寺	臨済	横瀬町中郷
10	深谷寺	大慈寺	曹洞	横瀬町川西
11	岩屋堂＊	常楽寺	曹洞（旧天由）	秩父市熊木町
12	白山別所＃	野坂寺	臨済	秩父市野坂町
13	西光寺	慈眼寺	曹洞	秩父市東町
14	小鹿坂	今宮坊	臨済（旧修験）	秩父市中町
15	般若岩殿	少林寺（旧蔵福寺）	臨建（旧曹洞）	秩父市番場町
16	鷲岩殿＃	西光寺	真豊	秩父市中村町
17	小坂下	定林寺（林寺）	曹洞	秩父市桜木町
18	童部堂	神門寺	曹洞（旧修験）	秩父市下宮地町
19	谷之堂	龍石寺	曹洞	秩父市大畑町
20	岩上	岩之上堂（観人）	臨済	秩父市寺尾
21	瀧石寺＊	観音寺	真豊	秩父市寺尾
22	神門＃	童子堂（栗福寺）	真豊	秩父市寺尾
23	岩本	音楽寺	臨済	秩父市寺尾
24	四万部＊	法泉寺	曹洞（旧修験）	秩父市別所
25	荒木	円福寺	臨建	秩父市下影森
26	五閑堂	久昌寺	臨済	秩父市上影森
27	大慈寺＊	大淵寺	曹洞	秩父市上影森
28	橋立堂	長泉院	曹洞（旧修験）	荒川村上田野
29	明地	法雲寺	臨建	荒川村白久
30	荻堂	卜雲寺	曹洞（旧修験）	小鹿野町薄田
31	西禅寺	観音院	曹洞	吉田町桜井
32	牛伏	法性寺	曹洞	吉田町般若
33	水込	菊水寺（長福寺）	曹洞	吉田町日野沢
34	―	水潜寺	曹洞	皆野町日野沢

【凡例】

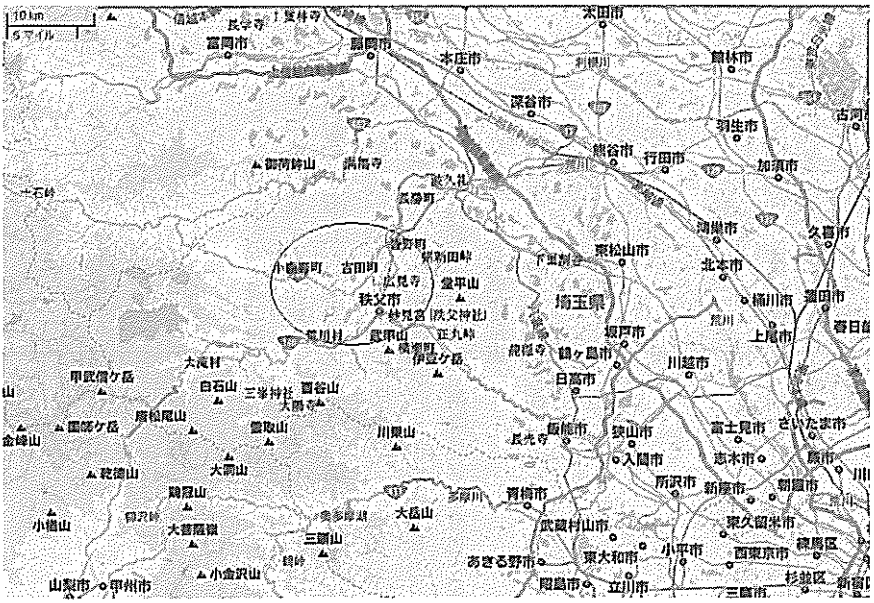
Ⅰ　＊は広見寺系（寺伝では「番付」とはほぼ同時点。ただし一妙音寺、25久昌寺は番付以降に末寺として成立したと伝承する）。＃は修験。

Ⅱ　臨済は臨済宗南禅寺派、臨建は臨済宗建長寺派、真豊は（新義）真言宗豊山派、天由は天台宗由門派（いわゆる天台宗。ただし天台宗門宗ごと天台宗寺門派もあるため峻別）の略。

Ⅲ　大棚観音ごと2真福寺が「番付」後の新参である。15少林寺は、妙見宮境内の近代廃絶した蔵福寺に代わり、近くの柳島（現東町）から移転し、蔵福寺の母堂由来を受け継いで成立。

Ⅳ　寺院と観音札所はおそらくほとんどはもともと別である。「番付」で寺号をもたない場合、小観音堂を近くの寺院が分担していくことで、現在の札所寺院が成立したと考えてよい。地名は大合併前。

Ⅴ　「番付」にはそれぞれの札所の観音の種類についても書かれているが省略した。



第一図　秩父周辺地図（楕円は札所分布域）

に、それぞれ二〇〇五年合併されているが、わかりやすさのため以前のままで用いる。近世の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（以下『記稿』と略す）は『新編武蔵風土記稿』［大日本地誌大系⑱］第十二巻（雄山閣・一九九六年六月）によった。

一、秩父霊場の成立[2]

秩父地方は関東平野西端の山また山を越えた山間地であるが、平安後期、要地として武士団が割拠した。これは勅旨牧である秩父牧や荒川上流で信濃・上野・甲斐に通ずる交通の要衝を確保する意味があったようである。秩父平氏は在庁官人の長にあたる武蔵惣検校の職を有した。また中世東国で盛行した板碑の石材産地としても重要であった。

その秩父の三十四霊場は西国三十三観音、坂東三十三観音と併せ百観音とされている。しかし後二者の諸寺院が西国および坂東に広範囲に位置する名刹、巨刹、古刹であるのに対し、秩父霊場は範囲が狭隘で個々の寺院も淵源が曖昧な貧寺が多い。また帰属宗派も西国・坂東両霊場と大きく異なる。秩父霊場は西国・坂東霊場とは多くの点で好対照な存在である。秩父に霊場が成立したのは、自然発生というよりは、それを意図した勢力の存在を想定するほかないのである。

札所32小鹿野町般若・法性寺に長享二年（一四八八）付「長享二年秩父札所番付」（内・外題はなく仮称）が伝わる。一

紙、状で、札所寺名を列挙している。

【史料】「長享二年秩父札所番付」（以下「番付」と略す。スラッシュは改行を示す）

（後筆）「寛政十二庚申年八月吉祥日當寺現住東水代ニ表裏セシモノナリ」

（以下番号と寺名とその本尊の観音の種類が続く。これは第二表上段にそのまま該当するため略す）

右此意趣者性空上人冥途討請／七日御説法あツて一百三十六地獄罪人／御たすけあツて炎魔王より布施に／給ハツて第一秩父巡礼二番坂東巡礼／三番西國巡礼あり熊野権現殊者／伊勢諸神悉討召性空阿弥仏ノ化身也／是ヲ拜辈者現世安穏後生善處無疑也

文治三年三月十八日　行基菩薩之作

道行四百八十三重

長享二年戊寅五月二日　筆者七十五才

書体などから年紀に疑念はなさそうだが、文章が滅裂であり、記した人間の知識水準や階層を窺わせる。ここでは霊場を行基菩薩が文治三年（一一八七）選定したとされ（原文マ、。年代が数百年もずれている）、長享の時点ですでに三十三番まで霊場が確立していた。一方で近世以降の順番とはまったく異なっている。近世の順番は、江戸からの参詣客をみこんで江戸に近い1秩父市栃谷・妙音寺（通称四万部寺）からはじまり、左回りの渦巻き状に秩父盆地を繞る形になるが、「番付」では、秩父の中心地大宮郷が一番になっている。長野県佐久市鳴瀬の岩尾城址に「大永／大井弾正入道／五天」（大永五年＝一五二五）「（阿弥陀三尊種子）西國三十三番／祢父三十四番／坂東三十三番」とする古碑があり、このころまでには三十四箇所に増えていた。秩父の資料では30荒川村白久・法雲寺に遺る順礼札に「奥刕葛西住赤荻伊豆守平清定／西国坂東祢父百所順礼只一人／為二親菩提　天文五天（一五三六）三月吉日」とある。[3]

白木利幸氏によれば、「番付」の順番や含まれる霊場を分析すると、大宮郷を拠点に在家信者が何度かに分けて巡拝できるようになっているから、修験が起源にあるにせよ、修験者の修行順路として札所が設けられたわけではないらしいという。[4]当初から、非出家者の信仰をも意識しつつ設定された札所だったとみられる。

そもそも中世秩父地方の宗教情況をみると、まず中心にあるのは延喜式内・秩父神社である。中世妙見宮とよばれた同社は「柞（はは）の森」という荒川の段丘上にあり、古代以来の祭祀遺跡を遺していた武甲山を遥拝する意味があったといわれ

る。札所もまた、武甲山のみえる範囲内に集中していることが指摘されている。そして武甲山の男神と妙見宮の女神が年に一度逢う祭礼が日本三大曳山祭「秩父夜祭」である。秩父神社が妙見信仰を基盤にするようになったのは、秩父平氏が上野国花園息災寺（群馬県高崎市、現天台宗山門派妙見寺）から勧請したことによるという。『記稿』によれば天慶年中（九三八～四七）妙見が秩父に勧請されたという。起源は平将門との関係を謳う下総千葉氏による妙見信仰と同様であり、秩父にも城峰山など将門伝承は多い。[5] このように妙見宮には当地の豪族の影響が強くおよんでいたことを確認しておきたい。そして妙見宮は、境内に15母巣（ははそ）山蔵福寺（廃仏毀釈で廃寺。柳島少林寺が継承）、足下に湧水を祭祀する本山派修験の14今宮坊などを抱え、秩父盆地の中心にあって一大信仰圏を確立していた。そのため、真言系から天文二年（一五三三）本山派修験に移行する三峯山観音院高雲寺（現三峯神社）との微妙な競合関係が疑われる。文亀二年（一五〇二）高雲寺中興道満以降、各地の史料に高雲寺＝三峯社は登場するが、信仰圏が重複する秩父霊場と三峯両者に接点はみられない。

「番付」における札所寺院が多くは寺号をもたないことからもわかるように、各札所自体はもともと寺院としての体をなしていず、小堂・草庵を近隣の寺院が管理・内包している（現在も近隣住民が留守居をしている札所は多い）。札所は草創の地より移転していることが多く、もとは水辺や岩窟にあり、修験者の修行場におかれた本尊としての観音に覆屋が設けられた程度であったろう。6横瀬（よこせ）町横瀬・卜雲寺はもと武甲山の熊野権現社、のち麓の池の畔にあり、24秩父市別所・法泉寺が「番付」に「十二番　白山別所」（傍点筆者）とあるのはわかりやすい例である。

秩父札所の成立は、特定の意図に基づくものであろうということを指摘した。妙見宮と関係を有し、なおかつ14今宮坊に代表される修験者が巡錫して廻った小堂が庶民に開かれる形で札所に指定されたのであろう。秩父神社の秩父夜祭では今宮神社（旧今宮坊跡地）の湧水を用いている。他方で当地の領主、丹党中村氏の作為を推定する説も有力である。[6]「番付」に記された略縁起によれば、性空が冥土で七日御説法をし罪人を救済した布施として、閻魔大王から秩父、坂東、西国巡礼のことを教えられたので、熊野権現など十三の権者とともに順礼したとある。このように性空が前面に押し出されている。性空（九〇七～一〇〇七）は西の叡山とも喩えられる播磨国書写山円教寺（兵庫県姫路市、天台宗山門派）の開山であり、法華経の持経者である。円教寺は西国三十三箇所霊場の一つであり、その霊場開創伝説にも性空は現れる。「番付」と似た設定であるものの、主人公は長谷寺開山の徳道であり、中興の主人公は法皇入覚（追号・花山）で、そこに巡礼

紹介者として性空が登場するにすぎない。なぜ秩父で性空なのか。丹党中村氏は承久の乱の論功行賞によるものか、播磨国宍粟郡三方西郷（兵庫県宍粟市）に所領をえたことで西遷御家人となり下中村と通称される。秩父にとどまった上中村は下中村を通じ播磨と関係を生じ、このことから播磨国書写山性空を淵源とする秩父札所縁起が生成されたとみられている。札所が上中村氏の勢力範囲とどのように関係しているか、今後検討の要がある。

各札所の名称からも、その原初形態をみてとることが可能である。例えば18秩父市宮地・神門寺は、妙見宮の広義での境内地にあたる立地である。「宮地」は妙見宮地内の意であろう。「神門」の訓はゴウドであり、神処や神戸という意であろう。また5横瀬町横瀬・語歌堂には、檀越が観音の化身と歌について語り合ったという近世の縁起があるが、「番付」では「廿六番　五閣堂」になっている。伽藍のさまを表現した五閣堂の方が正しい表記と思われるので、音当てから歌にからめた縁起が作られた過程がみてとれる。

なお蛇足ながら、「武蔵秩父ノ之巡禮」とある明応庚申（明応九年（一五〇〇）五月戊寅付『稱阿（十七代同阿）瑞夢記』（『浄土宗本山蓮華寺史料』）を中世史料として挙げておこう。

二、秩父札所に対する禅宗の浸透

秩父札所における禅宗寺院の比率はきわめて高い。むろん現在の帰属宗派は近世あるいは廃仏毀釈前後に確定したものであり、曹洞宗が無宗派ないし他宗派の観音堂を蚕食した例が多いことを考慮すべきではある。例えば18秩父市下宮地町・神門寺（現曹洞宗）と24秩父市別所・法泉寺（現臨済宗南禅寺派）、28秩父市上影森・橋立堂（現曹洞宗）は本山派修験の14秩父市中町・今宮坊（現臨済宗南禅寺派）末寺であり、11秩父市熊木町・常楽寺（現曹洞宗）はもと天台宗山門派、31小鹿野町飯田・観音院（現曹洞宗）も本山派修験であった。とはいえ、このことを考え合わせても、廃仏毀釈でなくなった曹洞宗寺院も多いから、秩父郡市の全寺院に占める禅宗寺院の高比率と有意の差はないものと思われる（第一表参照）。ちなみに全宗派の寺院総計の変化は、幕末四五一→一八八五年末二六〇→一九六〇年現在一六四箇寺という（『秩父市誌』）。

秩父での禅宗寺院は、高峰顕日が正和二年（一三一三）開いたと伝える臨済宗建長寺派の大滝村大滝・大陽寺が古い。寺伝では顕日が夢想八年をすごし、もとは天台宗修験道場だったともいう。秩父市山田・光明寺は旧真言宗で、建長寺から法性国師物外を迎え文保二年（一三一八）臨済宗に改宗した。開基の関口丹後守は丹党の末裔という。のち天正十五年

（一五八七）さらに曹洞宗に転ず。ほか建長寺派の秩父市下影森・金仙寺は応永十五年（一四〇八）寂の香庵道虎が開山、丹党中村左衛門公行開基。同派では荒川村上田野・清雲寺が応永二十年（一四一三）開かれ、近代に15札所になる秩父市番場町（札所指定以前は同市柳島）・少林寺もそうである。それに続く南禅寺派の秩父市田村・円福寺は、門弟による『白崖和尚語録』によれば、白崖宝生が「丹氏」（丹党一派の意カ）に請われ開く。二世南岩天揚は大滝村大達原・円通寺を中興、秩父市久那・宝林寺、23秩父市寺尾・音楽寺、小鹿野町長留・長福庵の開山。三世竹印昌岩は8横瀬町横瀬・西善寺、5横瀬町横瀬・長興寺、小鹿野町伊豆沢・雲竜寺を開く。ほか南禅寺派の長瀞町本野上・総持寺は法灯国師無本覚心によるという。多くの寺院は村落の耕作地の一角にあるが、大陽寺は盆地から隔絶し背後を三峯山に通ずる深山幽谷の山嶺中腹にある。

禅宗のうち臨済宗が曹洞宗より先に秩父に展開したのは、おもに鎌倉との都鄙往来が関係するのではあるまいか。秩父在地の武家（丹党カ）による導入や、禅僧が鎌倉に近い修行場として秩父を選んだのであろうか。

さて、念のため他宗の様相を概観すると、秩父市東町の浄土宗鎮西派惣円寺はもと秩父市蒲山にあり、善光寺仏を有している。その信濃善光寺は秩父札所のあと、坂東・西国を含む日本百観音結願の寺とされている。秩父は山峡に閉ざされた盆地ではなく、峠道を通じて、上野、信濃、甲斐の三国に開かれていたことを井出孫六氏は実体験から語っている。[7]

とはいえ浄土宗は秩父に一寺のみ、真宗と時宗は皆無である。一見、浄土教不毛の地のようであるが、丹党中村一族による延慶（三年〈一三一〇〉）中秋廿日付の板碑（秩父市寺尾、真言宗豊山派光正寺飛地境内。市指定文化財）に「同生西極楽之国」とある。『記稿』によれば8西善寺、15蔵福寺、25久昌寺などは弥陀三尊を本尊としていた可能性が高く、浄土系寺院が禅宗に転宗させられたとみられる。曹洞宗広見寺末の荒川村贄川・阿弥陀寺は、貞治二年（一三六三）広見寺二世東雄朔方の開山による。本尊は阿弥陀であり、寺名ともども気になるところである。このように、本尊阿弥陀と禅との整合性がみられない禅宗寺院が少なくない。[8] さらに時宗配下で在地民間宗教者（半僧半俗）の鉦打が大宮郷（秩父市中心部）や大野原（秩父市。現市街地の北に隣接）にいたのである。[9] かれらは武蔵国秩父郡に隣り合う上野国甘楽郡譲原満福寺（群馬県藤岡市）を小本寺としていた。秩父神社のすぐ下に道生（どうしょう）町があり、以前は「道場」とも書かれていた。秩父市教育委員会文化財保護課の教示によれば語源は不明とのことであるが、全国各地にある時衆寺院をさす「道場」地名と同類の可能性がある。

中世の石造物といえば板碑が想起される。秩父から平野部の出口にあたる、荒川沿岸の大里郡寄居町波久礼（はぐれ）周辺は、板碑の素材である緑泥片岩（通称青石）の産地であり、すでに古墳時代には千葉県木更津市金鈴塚古墳の石棺などに用いられていた。秩父山地の東端の比企郡小川町下里割谷も近年、採掘跡地として注目されている。国内最大の板碑は秩父郡長瀞町野上下郷の応安二年（一三六九）銘の五三七㌢である。

三、曹洞宗広見寺の誕生[10]

今回注目するのは曹洞宗である。末寺一二〇〇を有し総持寺、永平寺とならぶ曹洞宗三大本山の一つ、陸奥国黒石正法寺（岩手県奥州市水沢区）二世月泉良印の門弟天光良産は、兄弟子通海良義により貞治五年（一三六六）に創建されたと伝える埼玉県飯能市直竹（那波嶽）長光寺二世をへて、妙見宮の北にあたる大宮郷宮地の地に広見寺を明徳二年（一三九一）に開いた。延享四龍集丁卯（一七三七）冬十一月七日付・十四世大梁禅棟『大林山廣見寺記』（『埼玉叢書』第三。以下『廣見寺記』と略す）には、良産による神人化度伝承があり、その対象となった龍は、妙見菩薩であったという。その内容はまさに広見寺に有利に解釈された妙見宮の神託にほかならない。妙見宮社家薗田家は同寺を菩提寺としたという。明治以前まで毎年二月初寅の日に末寺住職率いて妙見宮で「虎懺法」を修した。毎年七月、秩父神社の川瀬祭御興洗いを妙見淵で行うのも寺側は化度譚に由来すると伝える（寺側の自称の可能性もある）。寺の門前には妙見堂がある。また広見寺三世瑞山守的は妙見宮と一体であった14今宮坊の境内に末寺満光院を置いたという。「番付」では一番となっている17定林寺（通称林寺。現曹洞宗）は、平将門の子とされる壬生良門の家臣林定元の遺児良元が両親のため建立した、名のとおり林家の持仏堂とされる寺である。同時に林家は妙見宮の触役であったという。[11]「番付」では二番の15蔵福寺は妙見宮境内にあり、広見寺二世東雄朔方（明応二年〈一四九二〉寂）が開山という。年未詳六月十八日付「上杉房顕書状」（『新編埼玉県史』資料編5［中世1　古文書1］、九〇七〈号文書〉）に蔵福寺がみえていて、房顕が歿する一四六六年までには蔵福寺が存在していたことになる。

ここで注目したいのは、本寺である正法寺に遺されている『正法年譜住山記』である。[12]同書は永正十年（一五一三）、もと同寺百十五世であり、住職を退いたのち同寺二代月泉良印塔頭の続灯庵の五代庵主となっていた寿雲良椿の手によるものである。

十四丁オは正法寺二代月泉良印の法嗣の交名「当寺二代月泉大和尚之法嗣之御人数記之」である。月泉良印の第三番法嗣として武蔵国長光寺（「武蔵国　那波嶽」）開山の通海良義、

第十六番に「十六番　超意都寺　天光良産　本寺　廣見寺」とある（超意の左の傍書は「毘雪」）。「都寺」は禅院の役職（都寺・監寺・副寺とある寺務・経営実務の統括者）であり、毘雪超意と名のっていたようである。「古代不相知…」「天光良産」「本寺　広見寺　武州秩父郡」はすべて後筆と考えられ、筆者良椿は永正十四年（一五一七）に入寂するまで、一度書き上げた『正法年譜住山記』に若干の補筆をしており、筆跡から、このときの筆とみられる。『正法年譜住山記』編纂後、何らかの新たな情報をえて、「昔は知らなかったけれども今回改めて付け出す」として毘雪超意に広見寺開山の「天光良産」をあてたということであろうが、その新たな情報がどの程度のもので、広見寺からの届け出によるのものかどうか、戦国期正法寺教団における一つの解釈という程度のものなのか、等は現時点では未詳とするほかない。

通海良義の下の「長覚寺」は群馬県富岡市上高尾にある長学寺である。寺伝では応安二年（一三六九）に通海良義が来たりて真言宗寺院を曹洞宗に改宗、上野国一宮貫前明神に授戒したという（『群馬県の地名』日本歴史地名大系第一〇巻）。武蔵の方は「長光寺」であったとする江戸時代の別の史料がある。それは曹洞宗瑞雲院（山形県米沢市、正法寺末）にある『正法二世瑞雲開山月泉良印禅師行状記』で、前半が正法寺二世月泉良印の伝記、後半がその法嗣を列挙した法嗣帳である（前半の伝記は中世のものだが、後半の法嗣帳には江戸時代以降にならないと成立しない地名や語句が現れる。もとは伝記だけがあり、江戸時代以降にそれに法嗣帳を新たに書いて附加したものか）。ここに「三番　通海良義　上洲高尾長学寺、武州直竹長光寺、常州佐竹天徳寺、此之開山也」とみえる。ゆえに史料解釈としては「長覚寺」は上野国の方につくのではないか。ただし字画が似ている（「光」と「覚」の混同はしばしばある）ことから、あるいは良椿ないし戦国期正法寺教団が上野と武蔵とに同名寺院がそれぞれあったと認識していたのかもしれないが、やはり未詳である（以上、正法寺関連につきここまで佐々木徹氏の大いなる教示による）。埼玉県でも長光寺と広見寺は曹洞宗の最古級である。

さて、誉田慶信氏は、出羽国の事例から、一見すると禅宗が山岳信仰を包摂し草深い農村を志向していたかのようにみえるが、貨幣経済・商業への関心があり、陸上・河川交通の要地にて弘通している事実を指摘している[13]。それを参照すれば、札所も秩父盆地の辺縁にあって決して前人未踏の深山幽谷のような場にあるわけではなく（その後人里に移転してきた例も多い）、大宮郷は妙見宮門前町であり、荒川（寛永六年＝一六二九に付け替えられて入間川と一緒になるが、それまでは現在より西の地域を流れて古利根川に注いでいた）を使った水上交通が可能であった。ただし人間や物資の集散する水陸の交通要

路や都市的な場を掌握しようとしたのは浄土教諸宗も法華宗も同様である。したがって伊藤克己氏が指摘するように[14]、禅宗に限って水利権・水源（含温泉地）の確保に努め、山岳に固執した事由を明らかにしなくてはならない。

そこで『正法年譜住山記』十七丁ウをみると、通海良義の関東での活動の説話が載せられている。上野国一宮貫前明神への神人化度の形態をとり、ここに上野国高尾と武蔵国那波嶽が登場する。ちなみに前述臨済宗建長寺派大陽寺にも妙見宮との神人化度伝承があり、さらに三峯、諏訪まで登場しているので（『秩父市誌』一一六ページ。ただし同寺によれば史料は遺っていないとのことで要調査）、秩父地方では宗派関係なく神人化度譚が流行していたらしい。

葉貫磨哉、広瀬良弘氏が挙げる事例に導かれると[15]、金槌の異称「玄翁」の語源となった源翁心昭（一三三九～一四〇〇）と下野国那須殺生石（栃木県那須郡那須町）や狐（茶枳尼天）と豊川稲荷妙厳寺の例で知られるように、禅僧が在地の神々を祈禱の霊力によって帰伏させることで、その土地の人々に承認されたことを描く伝承が神人化度譚である。禅僧が神や権力者におもねらず（結果として支持を受ける方便となるが）、ときに威圧する力をもつことが、新たな土地開発などによる在来神祇（を崇敬する勢力）との軋轢を克服する手段とみなされたのではあるまいか。また禅僧が独自の人脈・情報網によって治水に関する技術力をもっていたのではないかと広瀬氏は示唆する。技術力という点では、密教僧もそれを有していたらしいが（空海の丹生〈水銀〉伝承が端的な例）、密教が臨済宗法灯派（法灯国師無本覚心）や白山信仰をへてのちに曹洞宗に流入していることを考えれば、自然な推察かもしれない。また単なる着想ではあるが、禅僧は律僧ともども同時代の宋・元との関係があり、そこから鉱業・土木・農業技術を会得した可能性もあるかもしれない。水には祓いの効果があり、修験で重要視された。白山など山岳修験とも通じていた禅宗にふさわしい。14今宮坊のように、修験と曹洞宗とは親和性が高い（前述のとおり今宮坊旧境内に湧水が確認できる）。「竜」や「泉」の文字を寺号とした寺院が禅宗に多いことを伊藤氏は例証としている。水場確保を信仰獲得の手段としたのは禅宗の独自性であり、これは修験・密教に由来するではあるまいか。いずれにせよ神人化度譚における水神たる竜神済度は、当地の土豪や祀官の帰依など、何らかの事実の投影であろう。『廣見寺記』に妙見宮の神人化度譚、広見寺の龍灯松の説話がある。新仏教のうち、禅宗に限って秩父札所への参入を果敢に試みたのは、「信者獲得」「信田拡張」に霊場包摂が有効であることを知っていたからである。

ちなみに河野善太郎氏によれば[16]、古代修験者が岩殿正法寺（東松山市、現真言宗智山派）・都幾川慈光寺（比企郡ときがわ町、

現天台宗山門派）をへて武甲山、両神山、三峰山へ入っているという。秩父地方は顕密寺院の空白地で、禅宗と親和性の高い修験霊場であったことも作用していたのであろう。荒川の水上交通で下流まで把握できる効果もあった。禅定をうる修行の場として、禅僧もそのあとをたどったのであろう。秩父山地の辺縁を基地とし、そこから秩父に分け入る行程も両者は似ている（飯能市長光寺・富岡市長学寺→秩父市広見寺）[17]。

こうして秩父の精神面での中枢である妙見宮に接近することで曹洞宗は勢力拡大に成功した。それと並行して、水場・温泉地への進出も行われた。秩父札所は水辺の観音堂がそのまま寺院となったものが少なくないようである。13旗下慈眼寺（ハケは関東方言で崖の意）、19龍石寺（旧称瀧石寺）、33長福寺（通称菊水寺）、34水潜寺（以上曹洞宗）などである。また温泉と札所も重複するところがあり、8西善寺（臨済宗南禅寺派）は秩父七湯のうち大指の湯（横瀬町横瀬。現在涸渇）、30法雲寺（臨済宗建長寺派）は鹿の湯（荒川村白久温泉）にきわめて近い。秩父七湯自体は近世成立だが、開湯伝承などからほかに中世後期には荒川村日野・鳩の湯、同村贄川・柴原の湯なども禅宗寺院や札所に近い。

四、広見寺の札所包摂

各札所の成立と別当寺の成立は峻別しなければならない。例えば二十二番は秩父市寺尾・童子堂栄福寺となっているが、正確には童子堂と永福寺は別個で、後者が前者を内包していったのである。札所寺院と観音堂はほとんどが別々に誕生したとみられる。

広見寺は、開山天光良産のあと明応二年（一四九二）寂の二世東雄朔方が源蔵寺、19龍石寺、13慈眼寺、15蔵福寺、10大慈寺など七箇寺を開き、弘治元年（一五五五）寂の三世瑞山守的が1妙音寺ほか七箇寺、元亀三年（一五七二）寂の五世真雄正顔が25久昌寺ほか四箇寺を開くなど、『記稿』によると三六の末寺があったという。広見寺には近世でも早い段階の寛永十年癸酉（一六三三）卯月十五日付「広見寺・末寺寺領目録」（『新編埼玉県史』資料編18［中世・近世　宗教］）が遺り、そこにもほぼ同数の三四末寺が載る。末寺は三五（うち廃寺一五）、孫末六（うち廃寺五）で二箇寺は近代に法人格をえている（いずれも含小庵）。寺伝によれば二世東雄朔方（明応二年＝一四九二寂）から六世天秀彭盛（文禄二年＝一五九三寂）までに三四箇寺が開かれている。末寺は、北は黒谷から西は三峰口まで、荒川、横瀬川、浦山川沿いに分布している。開創年代の寺伝はあくまで近世以降のものであるが、ありがちな「行基開山」などという突拍子もないものと異なり、広がり方といい時代設定といい、史実とみてよいと思われる。禅宗の場合「招請開山」といって開山した僧の師僧を名義上の開

山に仰ぐことがあるが、それでも年代が極端にずれることはない。「番付」をみて気づくのは、広見寺の末となっている寺は、蔵福寺をはじめとして寺号を最初からもっている（すなわち「番付」当時から札所と寺が一体）ことである。意図して札所に介入したとみられる。また土豪・豪農クラスは広見寺檀家ながら同寺末寺開基として墓は末寺境内にある。末寺は個々の家の持仏堂のごとくである。

佐藤久光氏によれば、秩父札所は大永五年（一五二五）ころ三三から一増えて三四に確定したとみられる。しかし地方霊場であった秩父霊場を坂東や西国の霊場に比肩しうるまでに成長させたのは、氏のいう「修験僧、廻国僧」の努力ではなく、時期を考えれば、曹洞宗の力が大きかったと思われる。奥羽では中世、すでに会津、相馬に霊場があって、[18]巡礼が行われていた。広見寺は奥羽に本山、関東に末寺という数少ない例であり、秩父は奥羽の人々に巡拝しやすい位置関係にあった。前掲の順礼札は奥羽に多いこともこの傍証となる。もっとも、曹洞宗は武士とも結びつくので、純粋な庶民信仰として中世の霊場巡礼は考えにくい。これら順礼札も武家のものが多い（秩父の禅宗寺院も土豪開基が多い）。ともあれ、曹洞宗は握った札所を霊場として強化していった。広見寺の拡大路線を進めた東雄朔方の在世とまったく同時期に作成された「番付」は、その成立年代をふまえると、曹洞宗による霊場把握のための備忘録か末寺帳に準ずるものにあたるのかもしれない。

白木利幸氏は、一五世紀にはあった音楽寺・長興寺はまだ別当たりえていず（『記稿』）、「番付」当時に禅宗が札所を支配していたのは三十一番別当西禅寺（現8西善寺）のみとしている。しかし河野善太郎氏は各寺を精緻に分析し、[19]三段階を提示している。すなわち「番付」当時の禅院としては、30法雲寺、8西善寺、19龍石寺、15蔵福寺。「番付」成立後から江戸開府までの時期には、すでにあった音楽寺が「小鹿坂」（のち23）を吸収、すでにあった長興寺が「明地」（のち9）および五閣堂（のち5）を吸収、26円融寺、13慈眼寺、10大慈寺、25久昌寺、27長泉院、7法長寺。これ以外の禅寺札所は江戸期以後の改宗か境内への包摂などによる成立としている。広見寺についていえば、「番付」当時すでに寺号をもっていた札所寺院（19瀧石寺、15蔵福寺、10大慈寺）を中興開山し末寺としているので、同寺の目ざす意図は明確であろう。

おわりに

臨済宗では、台密薬上流祖でもある明菴栄西が密教祈禱を行ったり『興禅護國論』で達磨宗を批判し浄戒を主張、円爾弁円が京都東山東福寺を天台・真言との兼学としたことが知られる。このように旧来の顕密八宗とは対立しなかった。他

方禅宗の中では、「臨済将軍、曹洞土民」といわれ弘通対象が棲み分けられていた。

曹洞宗は第四祖・瑩山紹瑾（一二六八～一三二五）が大転換を行う。紹瑾は弘安九年（一二八六）紀伊国由良興国寺の心地覚心の許で参禅し、白山系天台宗寺院の改宗をする。[20] これを契機に曹洞宗は葬祭、祈禱、受戒によって戦国期に拡大した。[21] この動向は、祖師道元希玄が『正法眼蔵』仏道巻で「禅宗」「曹洞宗」といった宗派性を拒否し、修証一等とそれによる只管打坐を唱えた孤立性とは大いに異なる方法である。

東北地方では、縁起などの分析から、顕密から曹洞宗への改宗寺院が多く、[22] 三本山の一つで広見寺の本寺、陸奥国黒石正法寺は、曹洞宗が顕密寺院に入りこみ共存し、やがて凌駕する過程をみせる。[23] 関東では律院から臨済宗への移行がみられる。[24] 新潟県下越地方では土俗的な「妻帯宗」が曹洞宗になっているとされる。[25] 愛知県知多半島北半の農耕儀礼虫供養は、融通念仏信仰や時衆道場主体のものが曹洞宗寺院主導に変化している。[26] 神奈川県足柄上郡山北町世附（ダム造成のため水没・移転）の百万遍念仏が営まれるのは、念仏とは無縁であるはずの曹洞宗能安寺である。[27] 時衆最大の道場というべき藤沢清浄光寺（神奈川県藤沢市）の根源の地である俣野（藤沢市および横浜市戸塚区）周辺には、同寺が戦国期に百年あまり活動停止していた間隙を縫って、時宗寺院は皆無で曹洞宗寺院ばかりが広がるのである（藤沢市雲昌寺、東勝寺、花応院、横浜市戸塚区福泉寺、龍長院、泉区東泉寺）。時衆の活動拠点の一つであった温泉や竜神信仰[28]を介して、やがて禅宗が拡大していくという。本稿で指摘した秩父霊場以外でも、近世になると四国霊場の十一番は臨済宗妙心寺派藤井寺、十五番は曹洞宗国分寺、三十三番は臨済宗妙心寺派雪渓寺となっている。

死者をホトケとして崇敬するのは、直接には禅宗の受戒成仏・没後作僧を死者に適用したものである。[29] 浄土教の〝誰しも死後仏となる〟思想に後退したとはいえ、禅僧が将来した北宋・崇寧二年（一一〇三）『禅苑清規』による葬儀の形式が定められ、通宗派となったことは、葬式仏教確立に一つの画期をなした。もともと来世観をもたない禅宗が葬送儀礼に参入したことの意味は大きい。これにより中世前期に葬送に従事した律僧・時衆から、曹洞宗やその他の宗派に、貴賤の信仰が移行していく。

こうした禅宗の流れの上に、本稿を簡単にまとめてみる。秩父札所は当初、妙見宮と修験者が中心となり、丹党中村氏の意志の下に成立した、三三の小観音堂を巡礼するものであった。やがて神人化度の縁起を携えた方法によって妙見宮に接近した曹洞宗正法寺の天光良産により、広見寺が開創さ

れ、霊場の末寺化が進む。そこからは時衆、真宗など浄土教は排除される一方、臨済宗も同様に前後して山岳霊場に入りこみ、新義真言宗も同調していく。

具体的には、陸奥国黒石正法寺の末寺である宮地広見寺が室町期に秩父盆地に入り、それを拠点に末寺が拡散していった。札所寺院の末寺化に成功している。禅宗が山岳や水の信仰と親和的であることが背景にある。このことが正法寺の『正法年譜住山記』で明らかとなった。そしてそれを有利に進めるために、妙見宮社家勢力との協調関係がみてとれる。そして三四に増えた秩父の札所観音霊場信仰は、近世に江戸庶民の信仰と遊興をかねて盛行することになる。統一した意思はなかったにせよ、結果として、丹党中村氏、修験、禅宗の協働した成果が秩父札所とみることができる。

秩父郡市が稀にみる禅宗王国となったのは、山岳、修験、神社（式内社）、水場、温泉といった存在を足がかりに〝旧仏教〟の地盤を換骨奪胎していく曹洞宗相伝の手法がもっとも成功しやすい土壌であったことにあろう。

禅僧は修験者の足跡をたどって秩父山地の山麓から盆地の中央に進出していった。一方で、秩父山地のつけ根の埼玉県入間郡越生町龍ケ谷・龍穏寺は、山奥に進まず、逆に中世後期に平野部に数多くの末寺を展開していき、やがて関東曹洞宗で三指に数えられる名刹となる。[31] しかも広見寺と同じく竜神（神人化度）伝承を携えて（これにつき別稿の用意がある）。

もともと秩父盆地には濃厚な浄土信仰があり（前掲註（8）『秩父市誌』一〇二四ページからの市内各寺院の沿革）、中世の色彩を遺す時衆の在地宗教者たる鉦打も存在したが、浄土系寺院は今わずかに一箇寺しかない。6横瀬町横瀬・卜雲寺には、西大寺流（黒衣方）律宗が好んだ清涼寺式釈迦如来がある。曹洞宗に目だつ竜神伝承にせよ、施浴（温泉）にせよ、もともと時衆が得意とした。「室町・戦国新仏教」というべき曹洞宗は、「旧仏教」からはもちろん、「鎌倉新仏教」たる浄土教諸宗の基盤をも超越ないし吸収しつつ拡大していったのである。

最後に一言、従来の秩父札所研究に、曹洞宗なかんづく広見寺を意識した切り口がなかったのは、大変不可思議に思われた。今後の研究に本稿が新視点を提供できたのではないかと考える。

註

（1）拙著『中世時衆史の研究』（八木書店・二〇一二年六月）。時衆が「鎌倉新仏教」（実際には「室町・戦国新仏教」）の基盤となったことを指摘する一方、従来の鎌倉新仏教論・顕密体制論などに批判を加えた。

（2）秩父霊場に関する研究は多くない。後掲註（3）（4）（15）諸文献が挙げられる。ほかに田島凡海編『秩父観音霊場の文化

財』（秩父新聞社・一九五八年三月）、田島編『秩父観音霊場の創始とその文化財』（秩父新聞社・一九五八年三月）、矢島浩『秩父観音霊場研究序説』（豊昭学園・一九六六年八月）、秩父札所の今昔刊行会編『秩父札所の今昔』（同会・一九六八年一一月）、清水武甲『秩父浄土』（春秋社・一九七六年二月）、門間義一編著『江戸氏と秩父流一族と秩父札所に関する考察』（門間私家版・一九九七年〈月表記なし〉）などがある。ただしこれらは、古典に則るいわば概説で特に新味はない。宇高良哲「秩父札所の成立」埼玉県編集『新編埼玉県史』通史編2中世（同県・一九八八年三月）は、成立背景への言及が少なく、宇高「戦国期の仏教教団」『同』は、曹洞宗に関し言及が十全でない。清水史郎『秩父札所―観音霊場への誘い―』（さきたま出版会・一九九八年四月、のち改訂版、二〇〇〇年三月）と埼玉県立歴史資料館編集『歴史の道調査報告書　第十五集　秩父巡礼道』（同県教育委員会・一九九二年三月、のち服部英雄・磯村幸男・伊藤正義編集『歴史の道　調査報告書集成』16関東地方の歴史の道〈6〉埼玉3、海路書院・二〇〇七年七月に所収）、国際日本文化研究センター「観音霊験記　秩父三十四所」http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/reikenki/chichibu/index.html（同センターによれば紙媒体での公刊なし）は、便覧としてきわめて有用である。ほかに井上要『秩父丹党考』（埼玉新聞社・一九九一年八月）が寺院沿革につき概史言及。

(3) 佐藤久光「秩父札所の三十四ヵ所制」佐藤『遍路と巡礼の社会学』（人文書院・二〇〇四年八月、のち佐藤『秩父札所と巡礼の歴史』岩田書院・二〇〇九年九月に所収）によれば、秋田県雄勝郡羽後町杉宮の三輪神社（別当吉祥院廃寺）納札影写に「（阿弥陀三尊種子）坂東三十三所　左□□□／西國三十三所　〔一五〇三〕文亀三年八月日　願主武部少輔綱政」、和歌山県新宮市・熊野速玉大社蔵・永正十一甲戌（一五一四）十一月十五日付・銅造懸仏に観音順礼をさすと思われる「九十九所順礼」とみえる。ここまでは秩父も三十三所であった。一方、岩手県大船渡市三陸町新山神社（宝珠院廃寺）の順礼札には「奥州葛西住横澤　平重持／奉頂礼百ケ所／于時天文十一年壬寅今月日」とある。中尊寺瑠璃光院にも重持寄進の新山神社と同じものがある。

(4) 白木利幸「『長享番付』当時の秩父観音巡礼」『密教学研究』第30号（日本密教学会事務局・一九九八年三月）

(5) 村上春樹『平将門伝説』（汲古書院・二〇〇一年五月）。後述の17秩父市桜木町・定林寺も。

(6) 千嶋寿「秩父の歴史略年表」『秩父武甲山総合調査報告書［下巻］人文編（武甲山総合調査会〈言叢社制作〉・一九八七年三月）、小野文雄「埼玉の文化のルーツを考える」埼玉県県民部県史編さん室編集『埼玉県史研究』第二八号（同県・一九九三年三月）

(7) 井出孫六『峠の廃道―明治十七年秩父農民戦争覚え書―』（二月社・一九七五年一月、のち『秩父困民党』講談社現代新書531、同社・一九七九年一月と『峠の廃道―秩父困民党紀行』と改題し平凡社ライブラリー109、同社・一九九五年八月）。一八八四年の秩父事件では上州と信州佐久の運動家が参加し、事件は秩父ではなく長野県佐久郡東馬流にて終焉を迎えているのである（佐久戦争）。

(8) 秩父市誌編纂委員会編纂『秩父市誌』（埼玉県秩父市・一九六二年五月、のち名著出版・一九七四年六月）一一八ページから浄土教の残照、寺院一覧一〇二四～七ページおよび小鹿野町誌

編集委員会編『小鹿野町誌』（同町・一九七六年三月）一〇二〇～三ページ「新編武蔵風土記稿所載の寺院一覧表」。

(9) 高野修「時宗教団における沙弥について　附・譲原萬福寺所蔵の沙弥文書」藤沢市文書館編集『藤沢市文書館紀要』第六号（同館・一九八三年三月）。これによると、武州秩父郡大宮郷頭玉阿弥組下に四名いたが、玉阿弥含め二人だけになってしまったので、毎年の本山清浄光寺への挨拶義務を減らしてほしいという文化三年（一八〇六）八月付文書が満福寺にあるという。

(10) 町田廣文『廣見寺ものがたり』（宗教法人廣見寺・一九九九年二月）

(11)『記稿』で定林寺は「園田筑前觸下諏訪社人丹生兵部持」とあるのみで、宗派・本末の記事なし。

(12)『水沢市文化財調査報告書一七・奥の正法寺―正法寺総合調査報告書―』（同市教育委員会・一九八七年三月）「古文書・寺宝編」三〇～一ページ。

(13) 誉田慶信「中世後期出羽の宗教」伊藤清郎・誉田慶信編『中世出羽の宗教と民衆』奥羽史研究叢書5（高志書院・二〇〇二年一二月）

(14) 伊藤克己「中世の温泉と「温泉寺」をめぐって」歴史学研究会編集『歴史学研究』№639（青木書店・一九九二年一一月）

(15) 葉貫磨哉「洞門禅僧と神人化度の説話」『駒沢史学』第十号（同会・一九六二年一一月、のち葉貫『中世禅林成立史の研究』吉川弘文館・一九九三年二月に所収）、広瀬良弘「曹洞禅僧における神人化度・悪霊鎮圧」日本印度學佛教學會編集『印度學佛教學研究』第三十一巻第二號（通巻第62號）（同会・一九八三年三月、のち広瀬『禅宗地方展開史の研究』吉川弘文館・一九八八年一二月、第二章第九節に所収）

(16) 河野善太郎『秩父三十四札所考』（埼玉新聞社・一九八四年三月）

(17) なお現在荒川が流れ秩父鉄道が通る前出の寄居町波久礼～秩父郡長瀞町矢那瀬周辺は、近世以前の路でもあったが（熊谷通り）、平野部から秩父盆地に行く場合、今の秩父鉄道のように荒川沿いに寄居町方面の北方から入るのではなく、東方から釜伏峠（もう一つの熊谷通り）、粥新田峠（川越通り）や正丸峠（吾野通り）を越えるほうが主だったらしい。中山道熊谷宿方面から分かれて秩父郡大宮から日本三大峠の一つ雁坂峠から甲斐国に入る秩父往還もある。これ以外に定峰峠、山伏峠、妻坂峠、出牛峠ほか無数の峠と山道がある。

(18) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史』（塙書房・一九八二年五月）

(19) 前掲註（15）文献三二二ページ以下。

(20) 佐藤俊晃「曹洞宗教団における白山信仰受容史の問題(3)」『宗学研究』第三十号（同宗宗学研究所・一九八八年三月）

(21) 前掲註（14）広瀬書。

(22) 佐々木馨「出羽国の宗教世界」伊藤清郎・誉田慶信編『中世出羽の宗教と民衆』奥羽史研究叢書5（高志書院・二〇〇二年一二月）

(23) 佐々木徹「奥の正法寺の開創」入間田宣夫編『日本・東アジアの国家・地域・人間―歴史学と文化人類学の方法から―』（入間田宣夫先生還暦記念論集編集委員会・二〇〇二年三月）

(24) 桃崎祐輔「中世霞ケ浦沿岸における律宗の活動」市村高男監修・茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界―霞ケ浦・筑波山・利根川―』（高志書院・二〇〇七年一二月）

(25) 井上鋭夫『一向一揆の研究』（吉川弘文館・一九六八年三月）

(26) 鈴木泰山「尾州知多郡阿久比谷の虫供養について」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』第九輯（同所・一九六三年一一月、のち鈴木『曹洞宗の地域的展開』思文閣出版・一九九三年八月に所収）

(27) 『神奈川の民俗芸能』神奈川県民俗芸能緊急調査報告書（同県教育委員会・二〇〇六年三月）

(28) 西尾正仁「時衆と温泉」『御影史学論集』第二〇号（御影史学研究会・一九九五年一〇月）

(29) 秋月俊也「遊行僧と竜神（一・二）」『寺社と民衆』第5特別号・第七輯（民衆宗教史研究会〈岩田書院発売〉・二〇〇九年・二〇一一年三月）

(30) 佐々木宏幹『仏と霊の人類学—仏教文化の深層構造—』（春秋社・一九九三年一月、のち新装版、二〇〇〇年九月）、蒲池勢至「真宗の葬送儀礼」浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座蓮如』第二巻（平凡社・一九九七年三月）

(31) 近世の僧録所、関三刹の一。『記稿』では広見寺は正法寺末だが、寺院本末帳研究会編『江戸幕府寺院本末帳集成』上（雄山閣出版・一九八一年一一月）に影印が載る内閣文庫（現国立公文書館）蔵・寛永十年（一六三三）仲夏『龍穏寺末寺帳』によれば、長光寺（飯能市）、光明寺（秩父市山田）、3常泉寺（広見寺末。『記稿』では光明寺末）が龍穏寺直末となっており、広見寺は無極派のうち一州派の上野州白井雙林寺（群馬県渋川市）末となっている。雙林寺と龍穏寺の関係は書かれていないが、『龍穏寺末寺帳』にあることから、広見寺は龍穏寺の孫末という位置づけか。これは、曹洞宗文化財調査委員会編集『曹洞宗文化財調査目録解題集』6関東管区編（同宗宗務庁・二〇〇三年三月）によると文禄二年（一五九三）～延享三年（一七四六）の間、一州派に属していたためという。六世寂後、清泉寺（吉田町下吉田）末、雙林寺客末となっていたもの。『廣見寺記』はこの本末相論時の副産物なのである。のち延享三年正法寺末に復している。

〔附記〕本稿は寺社縁起研究会関東支部第99回例会（二〇一〇年六月二五日、於早稲田大学早稲田キャンパス）における同名報告を基礎とした。当日質問者ならびに佐々木徹氏、広見寺（町田廣文住職）、大陽寺（浅見宗達住職）より示教を頂戴したことに謝意を表す。なお秩父新開社主催で石田茂作、田島凡海氏らにより調査が行われ、山口平八『秩父札所の文化財を探る　観音霊場三十四所　秩父札所学術調査報告』（一九五七年三月）がまとめられている（埼玉県立浦和図書館埼玉資料室担当〈伊勢谷氏〉教示）。『秩父観音霊場の創始者とその文化財』（秩父観音奉賛会・一九五八年三月）もその関連刊行物と思われる。ともに稀覯本で披見する機会がないが、備忘のためここに記す。広見寺過去帳は元亀三年（一五七二）から記載があるようだが、ご住職によれば、すでに一四三〇年ころの戒名もあるといい、今後の検討が必要となる。同じく三世端山守的の享禄四年（一五三一）『武州秩父札所第一番法華山四萬部寺大施餓鬼因縁記』（『埼玉叢書』第六）も要検討。埼玉県県民部県史編さん室編集『荒川　人文I』荒川総合調査報告書2（同県・一九八七年三月）、秩父市教育委員会編『秩父市の文化財』（同委員会・一九九六年一月）にも注目したい。